「曖昧さへの態度」概念の臨床応用可能性(2)

—感情障害の病前気質と「曖昧さへの態度」との関連—

○甲田宗良¹・榎木宏之^{1,2}・近藤 毅¹ (非会員)

(¹琉球大学大学院医学研究科精神病態医学講座・²平和病院)

キーワード: 曖昧さへの態度, 感情障害, 病前気質

Clinical application of attitude towards ambiguity: The relationship between premorbid temperament and attitude towards ambiguity

Munenaga KODA¹, Hiroyuki ENOKI^{1,2} and Tsuyoshi KONDO^{1,*}

(¹Graduate School of Medicine, University of the Ryukyus., ²Heiwa Hospital)

Key Words: attitude towards ambiguity, affective disorder, temperament

目 的

曖昧さへの態度とは、「曖昧な刺激の処理において生じる, 認知的・情緒的反応パターン」と定義され(西村, 2007), 心理的不適応との関連が示されている。実際, 心理的不適応を引き起こすストレスの多くは, 個人特性, 環境, 文脈, 時期などによって, 肯定的とも否定的とも捉えられる曖昧なものが多い。そのため, 心理的不適応を引き起こすメカニズムにおいて, 曖昧さへの態度を含めた, 曖昧刺激に対する情報処理過程は重要な役割を担っており, 心理的不適応との関連を明らかにすることは意義深い(e.g., McEvoy & Mahoney, 2011)。

曖昧さへの態度を測定するツールとして, 曖昧さへの態度尺度 (Attitude towards Ambiguity Scale: ATAS; 西村, 2007) がある。従来の曖昧刺激の情報処理過程を測定する尺度が「曖昧さに耐えられる程度」などの一次的な特性に焦点を当ててきた一方で, ATAS は「曖昧さに対してどのような態度を取るか」という多次元からの測定が可能な尺度である。ATAS を用いた先行研究では, 「曖昧さへの態度」と心理的不適応の関連が検討されており, 概ね肯定的な態度が適応的に, 否定的な態度が不適応的に作用することが示されている。

しかし, ヒトの曖昧さに対する態度を規定する要因については未検討であることから, 本研究では「病前気質」に焦点を当てる。気質要素は遺伝的に規定された行動特性や習慣に現れる中枢神経伝達機能を反映しており, 個人の考え方や行動にも影響を及ぼす。近年, 感情障害の発病や表現型に病前気質が重要な役割を果たすことが示されており (Akiskal et al., 2005), 「曖昧さへの態度」の臨床応用において, 気質との関連を検討する意義は十分である。

そこで本研究では, 感情障害の病前気質と「曖昧さへの態度」との関連を明らかにすることを目的とした。

方 法

対象者 一般健常人 1003 名 (女性 502 名, 男性 501 名, $M=33.84 \pm 12.59$ 歳) であった。

指標 1. 曖昧さへの態度尺度 (Attitude towards Ambiguity Scale: ATAS; 西村, 2007): この尺度は「曖昧さの享受」「曖昧さへの不安」「曖昧さの受容」「曖昧さの統制」「曖昧さの排除」の 5 因子 26 項目であり, 6 件法で回答を求めるものである。本研究では, 榎木ら(in preparation)が抽出した「enjoyment」「anxiety」「exclusion」「acceptance」の 4 因子 25 項目を採用し, 分析を行った。

2. 感情障害の病前気質: Temperament Evaluation of Memphis, Pisa, Paris and San Diego-autoquestionnaire 日本語版 (TEMPS-A; Matsumoto et al., 2005) の短縮版 (Koda & Kondo, 2010) 及び Munich Personality Test 日本語版 (MPT; Akiyama et al., 2005) を使用した。TEMPS-A は 39 項目 4 件法であり, 「循環」「発揚」「焦燥」「不安」「抑うつ」の 5 下位尺度で構成される。MPT は「スキゾイド」「メランコリー」の 2 下位尺度を測定する 16 項目のみを用いた。いずれも, 気分障害, 不安障害な

ど, 感情障害の病前気質として検討が行われている。

手続き 幅広い年齢, 職種的一般健常人を対象に, 縁故法による質問紙調査を実施した。いずれも口頭及び書面にて, 研究目的, 協力の可否の自由・撤回可能性, 個人情報保護について説明し, 調査用紙の提出をもって同意取得とした。

倫理的配慮 本研究は, 琉球大学疫学研究倫理審査委員会の承認を得ている。

結 果

ATAS の下位尺度と各気質との相関係数を算出した。その結果, 「Enjoyment」は発揚 ($r=.350, p<.01$), メランコリー ($r=.222, p<.01$) との正の相関が有意であった。次に, 「Anxiety」は循環 ($r=.357, p<.01$), 焦燥 ($r=.276, p<.01$), 不安 ($r=.250, p<.01$), スキゾイド ($r=.205, p<.01$), メランコリー ($r=.230, p<.01$), 抑うつ ($r=.336, p<.01$) との正の相関が, 発揚 ($r=.230, p<.01$) との負の相関が有意であった。そして, 「Exclusion」はメランコリー ($r=.320, p<.01$) との正の相関が有意であった。

Table1 「曖昧さへの態度」と気質との相関係数

	Enjoyment	Anxiety	Exclusion	Acceptance
循環	.056	.357 **	.155 **	.143 **
発揚	.350 **	-.230 **	.028	.067 *
焦燥	.034	.276 **	.195 **	.065 *
不安	.047	.250 **	.137 **	.016
スキゾイド	.151 **	.205 **	.116 **	.153 **
メランコリー	.222 **	.230 **	.320 **	-.036
抑うつ	-.025	.336 **	.126 **	.153 **

* $p<.05$ ** $p<.01$

考 察

本研究の目的は, 感情障害の病前気質と「曖昧さへの態度」との関連を明らかにすることであった。

相関分析の結果より, 曖昧さを楽しむ態度は, 発揚やメランコリー気質との関連が示された。これらの気質はいずれも仕事熱心な特徴を有する。たとえ正解の無い曖昧な問題に直面しても, その状況を楽しむ態度は心理的適応と結びつくだろう。一方, 曖昧さに対する不安は, 発揚を除く全ての気質との正の関連が示された。いずれの気質も, 感情調整の困難さを有するため, 曖昧な問題に直面すると, 眼前の不安に対処できなかったり, 問題を回避する可能性が高い。そのため, 心理的不適応と結びつくだろう。曖昧さを排除する態度は, メランコリー気質との関連が認められた。メランコリー気質は, 杓子定規な認知様式, 行動傾向が特徴であることから, 曖昧さを排除することに労力を割り当てることが想定される。

以上の結果より, 感情障害の病前気質と「曖昧さへの態度」との関連が示されたといえる。生得的な気質特性は心理療法による変容ターゲットには適さないが, それぞれと関連のある「曖昧さ」への情報処理特性に介入することで, 心理的不適応を予防・緩和すること期待できる。